

海員組合担当支部へようこそ ▲▽▲▽ 小名浜支部の紹介

小名浜支部は、福島県いわき市小名浜にあり、小名浜港は福島県最大の港として重要港湾に指定されており、古くから漁船・商船の玄関口となっています。東北地方の中では降雪も少なく比較的温暖な地区です。支部の担当は国内部門のタグボート（小名浜港・原町港・相馬港）のほか、水産部門の遠洋マグロはえ縄漁船、サンマ棒受け網漁船、小名浜旋網漁協、茨城県大津漁協の大中型まき網漁船などを担当しています

見どころいっぱい・いわき市

近隣には水族館「アクアマリンふくしま」や、フラガールで有名な「スパリゾート・ハワイアンズ」、塩屋崎灯台、国指定天然記念物の賢沼ウナギ生息地などがあります。

国指定天然記念物・賢沼ウナギ生息地

沼は文部科学省の所有になっており、沼の北岸に密蔵院賢沼寺、沼のほとりに弁天堂があります。餌をもらうコイにまじってウナギが現れるので、チャンスがあれば見つけることもできるでしょう。昭和14年にウナギの生息地として天然記念物の国指定を受けて以来、淡水にすむシラスウナギはよく観察されています。小さな流れでもよくのぼる能力があることから、弁天川を遡上して沼へ入り、保護されたまま巨大化して生息していると考えられています。

訪ねてほしい塩屋崎灯台

塩屋崎灯台はいわき市平・薄磯海岸の海拔73メートルの断崖に立つ白亜の灯台。比較的变化の少ない福島県の海岸線で、美しい白砂青松の海浜が連なるいわき七浜で少し突出した岬の塩屋崎。福島県の郷土史では、「塩屋崎は東海岸一の難所にして、台下の険崖から一海里半余に暗礁が棋布し、外国船、日本船の沈没せるもの多し」と記され、古くは安政年間（1850年代）にこの岬にかがり火を焚き、航海の目印にしていたと伝えられています。

灯台は西洋の技術を取り入れて、明治32年（1899年）に建設され初点灯するも、昭和13年の福島県北方沖地震でレンガ石造の灯台が大破。その後、昭和15年3月30日に震災復旧工事で現在の塔形白色の鉄筋コンクリート造に生まれ変わりました。

平成23年3月11日の東日本大震災では消灯するも、約9カ月後には点灯復旧し、平成26年2月には灯台の一般公開が再開されました。いくつもの苦難を乗り越えてきたこの灯台の、その美しい雄姿を一目見ようとする多くの見学者が県内外を問わず足を運んでおり、現在も沖合40キロの海上まで光を放ち、船の安全を守っているこの灯台は、人々に愛され続けています。

塩屋崎灯台アラカルト

灯台の手前の敷地には全国で10番目の資料館として開設された「灯台資料展示室」があり、写真と模型を使い、海上交通の安全に寄与している航路標識の姿をわかりやすく紹介しています。また、敷地内には「霧信号用ラッパ」と「浮標用ベル装置」も展示されています。

記念碑・喜びも悲しみも幾歳月

塩屋崎灯台のふもとには、灯台守夫婦の生涯を描いた映画「喜びも悲しみも幾歳月」の主題歌「俺ら岬の灯台守は」で始まる歌詞を刻んだ記念碑があります。映画は灯台職員の手記をきっかけにし

て作られた木下恵介氏の不朽の名作の一つ。当時の人気スターだった佐田啓二と高峰秀子の主演で、灯台職員の半生を描き、日本中で大反響を呼びました。

美空ひばりの遺影碑・みだれ髪

国民的歌手・美空ひばりさんの復帰第1作として、塩屋崎の海をテーマとする「みだれ髪」が昭和62年12月に発表され全国でヒット、昭和63年10月に「みだれ髪」の歌碑が建立されました。現在は美空ひばりさんの遺影碑がならび、いわき市と美空ひばりさんの縁として紹介されています。

生活史 ※1 淡水に棲むシラスウナギ ウナギの幼生で体長6センチ以後のもの。一般的に成熟すると降海回遊をする。シラスウナギは水温12度以下で必要酸素の5分の3を皮膚から吸収する。

「海員だより」